吉村昭記念文学館 News

万年筆の旅 Vol.23

©2025映画「雪の花」製作委員会

今号の表紙　原作 吉村昭「雪の花」令和7年1月24日(金)より全国公開

映画「雪の花　―ともに在りて―」小泉堯史監督作品　出演：松坂桃李　芳根京子　役所広司

酒井シヅ氏特別インタビュー「解体新書」と「吉村昭」を語る

●第25回トピック展示開催報告　「吉村昭「冬の鷹」を読み解く―「解体新書」刊行250年―」
●令和5年度第2回企画展開催報告　「吉村昭の手紙」
・関連イベント開催報告　朗読とトーク 津田寛治が読む「破獄」「果てなき便り」
・参加型イベント募集報告　「吉村昭へ、あの人へ…今、贈りたいメッセージ」「私の心に残る吉村昭」
●第24回トピック展示関連イベント　「拳にのせた熱きボクシング」トークイベント開催報告
●吉村昭ゆかりの地　岩手県宮古市田老の防浪堤・津波防災伝承活動
●おしどり文学館協定　荒川区・福井県合同展示開催のお知らせ

酒井シヅ氏特別インタビュー「解体新書」と「吉村昭」を語る

今年は『解体新書』が刊行されてから250年の節目となります。長年医史学研究にたずさわってきた順天堂大学名誉教授・酒井シヅ氏に『解体新書』を読み解くヒントを、また長年交流を深めた吉村とのエピソードについてお話をうかがいました。

「解体新書」の歴史的意義について

「解体新書」は、時代が近代的に切り替わる、ターニングポイントになったわけですね。「解体新書」が出て、みんなが西洋はこういう具合になっているということを知って、日本も変わらなきゃと。西洋の学問を知らないと我々はだめだって。西洋の医学書を知りたいという、欲望というか、機会が出てきた。

それ以前が全く無ですからね。私も終戦直後は日本が外国に遅れていることで、すごく焦りましたね。戦争直後は物が無くて。戦争が終わり、さあこれからという時、私は高等学校入学前で、日本はものすごく遅れていた。これは私たちが頑張らなくてはと思ったからね。

今は日本が遅れているという気持ちが無いでしょう。このままいったら日本はだめになってしまうと。そういうのが今は無いものね、もう何十年も。

――改めて「解体新書」を読み直すとしたら

今は別の読み方でしょうね。「解体新書」の果たした役割を理解しながら評価する。私たちは「解体新書」を翻訳しなくてはという、切迫した状態にあったけれど、それじゃなくて、日本の歴史のなかで「解体新書」の役割は何だったのだろう、意義は何だったのだろうと。「解体新書」が翻訳された時代からどんなに変わってきたかというような見方でしょう。

吉村が「冬の鷹」で良沢を主人公に据えたことについて

うん、すごく面白いなと。杉田玄白も前野良沢も大変新しいことを、間違いなく受け入れた人。次の時代に向けて、世の中を引っ張り出した人ですからね。翻訳の原動力の基になったのが良沢で、玄白はそれを発展させる力。二人がいなければ事業は発展しなかった。本当に今でもそうだけれど、人の組み合わせが大事。

吉村昭との思い出について

――小川鼎三先生について

＊小川先生:酒井氏の恩師。吉村と懇意の間柄だった。

（吉村の）人柄を、小川先生は非常に好まれて。それでお互いを好きなのね。吉村先生も小川先生もお互いが理解し合っていたのね。

――吉村の資料調査について

私の研究室って人が来ると1時間でも2時間でも留まって話をしてという研究室だったから、非常に親しくなったのですね。しょっちゅう電話でやり取りして。疑問に思うと電話がかかってきたから。友達ですね。友達だと思っていました。

――長崎訪問について

一緒に長崎に行ったこともあったかな。なにかで長崎の町を一緒に歩いた覚えが……なにか食べて美味しかったな、とか。絶対に決まってるのね。自分は長崎にきたら、こことここしか行かないとか、言われた覚えはあります。

ご自身の研究について

――「医史学」について

（『病が語る日本史』の帯に記された吉村の推薦文「人間が決して避けられぬ病を通して日本史を見つめるという、着眼が素晴しい」を見せながら）まさにこれ。普通の日本史と同じです、それが病に引っかかっている。

――『病が語る日本史』の英訳本が近々出版されることについて

初めて、英語に翻訳されて外国に出るのです。今年中くらいに出るかしら。

＊出版文化産業振興財団（JPIC）より令和7年3月出版予定。

――これからの「医史学」について

もう、私はリタイアしましたから……（笑）。学問は人から勧められてではなく、自分からやろうと思えばできますよ。

酒井氏は常に穏やかな口調で、優しくユーモアを交えながらお話くださいました。過去の出来事を振り返りながら、今の私たちの在り方を見つめる姿勢が印象的でした。台風後の落ち着きを取り戻した秋日、酒井氏にはご協力をいただきまして心よりお礼申し上げます。

酒井シヅ|病が語る日本史』（平成14年 講談社）
日本人の病から歴史を見つめた酒井氏の書籍。

Profile

酒井　シヅ（サカイ　シヅ）

1935年生まれ。三重県立大学医学部卒業。東京大学大学院修了。医史学専攻。順天堂大学医学部教授、日本医史学会理事長などをつとめる。順天堂大学名誉教授。著書に『日本の医療史』（東京書籍）、『解体新書 全現代語訳』（講談社学術文庫）、『すらすら読める蘭学事始』（講談社）など多数。

第25回トピック展示開催報告

吉村昭「冬の鷹」を読み解く

―「解体新書」刊行250年―

会期：令和6年6月21日(金)～9月18日(水)

吉村初の本格的長篇歴史小説である「冬の鷹」は、安永3年(1774)に翻訳・刊行された「解体新書」の成立過程について描いた作品です。「解体新書」刊行で社会的栄誉を得た杉田玄白と、対比するかたちで学者肌の前野良沢の生き方に光を当てて描きました。展示では、二人の生き様について吉村がどう描いたかを読み解きました。

展示に際し、国文学研究資料館が所蔵する「解体新書」の初版本をお借りすることができました。貴重な資料を身近にご覧いただくとともに、改めて「解体新書」のもたらした歴史的意義について考えました。

「解体新書　序図」安永3年
『日本古典籍データセット』
(国文学研究資料館蔵)

「いかがでござろう。ぜひおきき下され」

玄白の眼が、良澤と淳庵に据えられた。

良澤たちは、立ち止った。

「いかがでござろうか。このターヘル・アナトミアをわが国の言葉に飜訳してみようではありませぬか。もしもその一部でも飜訳することができ得ましたならば、人体の内部や外部のことがあきらかになり、医学の治療の上にはかり知れない益となります。オランダ語をわが国の言語に飜訳することは、むろん至難のわざにちがいありませぬ。しかし、なんとかして通詞などの手もかりず、医家であるわれらの手で読解してみようではござらぬか」

玄白の顔には、はげしい熱意の色がみられた。(略)

「よくぞ申された」

良澤が、腹の底から声をしぼり出すように言った。

『冬の鷹』　昭和49年 毎日新聞社

昭和49年 毎日新聞社
津村節子氏寄託資料

千住小塚原で刑死人の解剖を見た杉田玄白と前野良沢は、持参したクルムスの解剖書『ターヘル・アナトミア』に書かれたことが、そのまま合致していることにいたく感嘆しました。これをきっかけに、『ターヘル・アナトミア』の翻訳事業が始まります。オランダ語からの翻訳に苦慮しながらも安永3年8月、ついに日本語翻訳書「解体新書」が刊行されました。しかし、この事業に参加した者の記載に前野良沢の名前はありませんでした。良沢は不完全な訳書である「解体新書」に、自分の名前を入れることを固辞したのです。

出版後、玄白は蘭学者としての尊敬を一身に集め、経済的にも不自由なく終生を終えます。一方、良沢はその後もオランダ語の研究活動を続け訳書も増えますが、名利をいやしみそれらを刊行することもなく、弟子もとらず、生活も貧しくひっそりと亡くなっていきました。

「解体新書」は良沢の訳業なくしては完成しなかったと同時に、玄白の実行力がなければ、その刊行には至らなかったでしょう。吉村は随筆「孤然とした生き方」(『吉村昭歴史小説集成』第七巻 平成21年 岩波書店)のなかで、「良沢と玄白の対照的な二人の生き方が、私には実に興味深く感じられる。それは、人間の生き方の典型をみるような思い」であると述べています。そして「良沢も玄白も、文化史上忘れることのできない偉大な人物であった」とし、吉村自身は、良沢のような「孤然とした生き方を理想」とし、「良沢の生き方に羨望を感じる」と記しています。

その他展示では、「冬の鷹」ゆかりの寺院や史跡などを写真パネルにて紹介しました。「観臓記念碑」が建つ荒川区回向院、刑死者ら無縁の供養のために建立された「小塚原の首切地蔵」延命寺、「解体新書」の功績を記念して「蘭学事始の地碑」が建つ中央区、「前野良澤の墓」の残る杉並区慶安寺、「杉田玄白墓」の残る港区栄閑院からご協力をいただきました。　(学芸員　篠田敦子)

令和5年度第2回企画展開催報告

吉村昭の手紙

会期：令和6年3月16日(土)～5月15日(水)

今回は、初公開多数となる吉村昭の手紙と関連資料を展示しました。作品執筆の背景や、作家との親交、妻の津村節子との軌跡など、手紙だからこそ伝えられた言葉を通して吉村の魅力を紹介しました。(以下＊当館蔵 ＊＊津村節子氏蔵)

津村節子氏と吉村司氏(吉村昭・津村節子夫妻ご子息)令和6年4月15日
吉村司氏特別寄稿「取材先から父の手紙」は本展図録に掲載しています。

Ⅰ 手紙にみる執筆の背景

最初に、作品に関する手紙から、執筆の背景と創作姿勢を紹介しました。吉村が取材した人物【写真1】や、ドラマ化作品に出演した俳優【写真2】、文芸評論家や先輩作家、編集者へ送った手紙を、取材手帳や自筆原稿と共にご覧いただきました。手紙には取材中の率直な本音や、苦心した執筆とドラマ化に対する心境、自身の作品に対する深い葛藤や思い入れが記されています。吉村の実直な人との向き合い方や、創作に対する厳しさが窺えました。

取り上げた作品と展示した主な書簡

「殉国」津村節子宛＊＊ **「羆嵐」**木村盛武宛＊ **「海も暮れきる」**根岸勲宛＊ 松岡みどり宛(松岡みどり氏蔵) **「破獄」**緒形拳宛＊ 丸谷才一宛(日本近代文学館蔵) 山口昭男宛(山口昭男氏蔵) **「冷い夏、熱い夏」**佐多稲子宛(日本近代文学館蔵 写真 磯田光一宛(県立神奈川近代文学館蔵) **「天狗争乱」**安岡章太郎宛(日本近代文学館蔵) 写真 小不動和明宛(福井県ふるさと文学館提供)など **関連資料** 自筆原稿「殉国」(日本近代文学館蔵)

【写真1】吉村が木村盛武へ送った礼状＊
昭和52年6月 「羆嵐」執筆のため取材した木村(当時旭川営林局農林技官)への礼状。苦心した執筆にふれ「事実のもつ力をどのようにかわして文学とするかが、私の課題」と記す。

緒形拳氏
©緒形事務所

【写真2】吉村昭 緒形拳宛書簡＊ 昭和59年8月4日消印 緒形はドラマ「破獄」(昭和60年 NHK)で佐久間清太郎を演じた。「商業主義的にあつかわれる」ことを懸念していた吉村が、緒形が演じることへの信頼からドラマ化の許諾を検討することを綴った。

Ⅱ 敬愛する先輩作家への想い

昭和26年(1951)、吉村は学習院大学文芸部で北原(津村)節子と出会い、同28年11月5日に結婚しました。二人は在学中から、文壇で活躍する先輩作家を訪ね、批評を仰ぎ、その姿勢に学びました。

展示では、中山義秀、八木義徳、丹羽文雄、石川利光、高見順、臼井吉見を紹介し、書簡を通して、吉村がどのように学んだのかをご覧いただきました。併せて、吉村が「文学の師」と慕った八木とその妻八木正子、「恩人」と語る臼井、吉村と津村の「恩師」であった丹羽との写真や、短篇「石の微笑」を高く評価した高見順、高見秋子夫妻との親交、中山や石川から受けた励ましの言葉などを紹介しました。吉村が感謝と尊敬の念を込めた手紙から、小説を書くことへの真摯な姿勢と、先輩作家が吉村に向けた眼差しを感じていただきました。

展示した主な書簡

■中山義秀より吉村宛＊ ■吉村、津村より八木義徳の妻八木正子宛(町田市民文学館蔵) 丹羽文雄宛(四日市市立博物館蔵) ■吉村より石川利光宛＊ 高見順宛・高見秋子宛(日本近代文学館蔵) 臼井吉見宛(臼井吉見文学館蔵)など

吉村が昭和41年、「星への旅」で太宰治賞を受賞するまでに出会った作家を紹介。昭和37年から平成18年にかけての書簡を展示。

Ⅲ 津村節子と交わした書簡

津村節子氏が所蔵するご夫婦の書簡をお借りし、その一部を紹介しました。吉村は死を見つめた結核闘病の体験や、両親を早くに亡くした自身の生い立ちにふれ、温かな家庭を築くことができた感謝の思いを、繰り返し記しています。初志を貫き、夫婦共に作家として歩んだ津村への手紙には、家族の幸せを何よりも大切にした吉村の深い愛情がこめられていました。

関連する著作や写真を交え、文芸部時代から年代順に書簡を展示。二人は便箋や葉書、稿半紙やノート、手帳など身の回りにあるものを使用し、その時々の心情を語りかけるように綴った。吉村は、心臓移植を題材にした「神々の沈黙」取材先の南アフリカ、ニューヨークから、切手代を節約し、数日分の手紙をまとめて津村に送った。

～作家たちから届いた手紙～

書斎に遺された川端康成、島尾敏雄、埴谷雄高、佐多稲子、今村昌平、江國滋、安岡章太郎、城山三郎からの手紙や、吉村が熊井啓(熊井美恵氏蔵)に送った葉書を紹介し、作家や映画監督との交流を紹介しました。

～吉村から読者への手紙～

吉村作品の愛読者土岐恭子氏が、平成4年(1992)、ご子息と共に82冊の感想を送ったことへの礼状(土岐恭子氏蔵)を紹介しました。

Special

吉村昭さんへ…届けたい言葉

最後は、手紙を取り上げた本展の特別コーナーをご覧いただきました。

当館朗読会にご出演、また本紙表紙絵や、吉村昭の映像を制作いただいた次の6名の皆様から、吉村、津村へ宛てた直筆の手紙と、吉村作品に言及された特別寄稿（パネル展示）をいただきました。皆様ならではの貴重なメッセージを紹介しました。

平松麻氏「映えあう声」（本紙vol.20表紙絵）を展示。

（前列右より）津田寛治氏、平松麻氏、山崎直史氏、竹下景子氏、橋爪功氏、（後列）赤江珠緒氏

橋爪功氏　竹下景子氏　山崎直史氏　平松麻氏　赤江珠緒氏　津田寛治氏

特別寄稿　吉村昭さんへ…届けたい言葉
本展図録に掲載しています。

赤江珠緒氏（フリーアナウンサー）「吉村作品の素晴しさ」
竹下景子氏（俳優）「『羆嵐』を読んで」
津田寛治氏（俳優）「情報が紡ぐ冒険活劇」（『天狗争乱』『破獄』）
橋爪功氏（俳優）「お墓にはちゃんと行きなさいよ」（『海も暮れきる』）
平松麻氏（画家）「吉村昭様」（『破船』）
山崎直史氏（TBSテレビ報道局）「『事実』を伝える思い新たに」（『関東大震災』）

展示室では短篇「鰭紙」（『天に遊ぶ』平成11年新潮社）を朗読する吉村の映像（日本近代文学館主催第8回「声のライブラリー」（平成9年2月8日）より日本近代文学館蔵）も放映しました。

ご来場の方々からは「手紙という通信手段を通して人間の心のやり取り、感謝など言葉の大切さを感じた」、「ご夫婦の仲の良さに改めて人の生き方を考えた」、「往復書簡の愛情の深さに感動した」、「（吉村の）心情が正直に書かれていて、くすりと笑わされた」、「手紙の文字が美しく大変感動した」、「人との関係性が面白く楽しめた」、「吉村昭という小説家の人となりを理解できた」、特別コーナーの皆様のメッセージが興味深かったなど、多くの感想をいただきました。（学芸員　深見美希）

吉村昭の手紙

展示図録のご案内
書簡90点他、資料を掲載。500円（税込）B5型、48ページ、オールカラー

特別寄稿
吉村司氏「取材先から父の手紙」　鵜飼哲夫氏（読売新聞編集委員）「吉村さんと〝文学の鬼〟」　澤田瞳子氏（作家）「歴史小説をめぐって――吉村昭と中山義秀」　平原一良氏（公益財団法人北海道文学館理事長）「気配りの見事さ」

「吉村昭さんへ…届けたい言葉」
赤江珠緒氏　竹下景子氏　津田寛治氏
橋爪功氏　平松麻氏　山崎直史氏

郵送販売も承ります。詳しくはお問い合わせください。

関連イベント開催報告　朗読とトーク
津田寛治が読む「破獄」「果てなき便り」

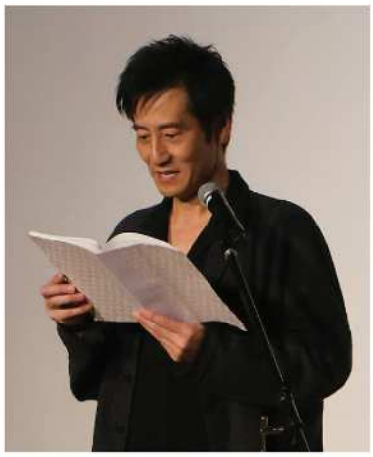
出演：津田寛治氏（俳優）
日時：令和6年3月20日（水・祝）14時～15時45分

吉村昭の歴史小説「天狗争乱」を愛読し、津村節子氏と同じ福井県ご出身の津田寛治氏をお招きしました。

『破獄』（昭和61年 新潮文庫）は、戦中・戦後の世相を背景に、昭和11年以降、4度の脱獄を重ねた実在の無期刑囚と看守との攻防を描いた長篇です。一方、津村節子『果てなき便り』（令和2年 文春文庫）は、吉村との往復書簡を通して、夫婦作家の軌跡を綴った随筆です。

「破獄」からは、主人公の佐久間清太郎が、昭和19年に網走刑務所、同22年に札幌刑務所を脱獄する場面、さらに翌23年、府中刑務所の所長鈴江圭三郎と出会ったことで、どのように佐久間の心情が移り変わるかを朗読いただきました。

また、「果てなき便り」からは、吉村が家族への深い愛情を綴った手紙を朗読いただきました。



津田寛治氏

荒川区公式YouTube配信中!!
令和7年3月31日まで。

津田氏は、緊張感に満ちた佐久間と看守、その心の動きを力強く、かつ繊細に演じ分けられ、満場を魅了しました。また「果てなき便り」では一転、互いを思いやる夫婦の手紙を穏やかに朗読され、ご自身も思わず、涙される場面がありました。

トークでは、朗読の感想や、吉村作品の魅力、今後演じてみたい役柄などを伺いました。故郷、福井の思い出を伺うと、記憶に残る「雪景色」を挙げられました。紫色に明るく光る夜空から「シルエット」になって音もなく降る雪を見上げ、さまざまな考えを巡らせたことが、ご自身の想像力を養うことに繋がったそうです。

吉村作品については「自分の足を使って情報を集める」ことの大切さにふれた上で、「吉村作品を体験することは、情報の価値観というものを知ることにもなる」として「多くの方に勧めたい」とお話いただきました。最後には、デジタル化が進む現在、「本を読むことで培われる想像力」や「創作意欲」の大切さについて、また今回の朗読作品を手に取ってほしいとのメッセージをいただきました。

参加された皆様からは「情感溢れる朗読が大変素晴らしかった」、「迫真に満ちた朗読に一気に作品の世界に引き込まれた」、「吉村作品が一層光った」、「本を手に取りたいと思った」、また津田氏の「声」と、「人間味あふれる」人柄に魅了されたなど、多くの感想が寄せられました。

企画展「吉村昭の手紙」参加型イベント募集報告

吉村昭へ、あの人へ…今、贈りたいメッセージ

企画展「吉村昭の手紙」では、吉村昭や津村節子、心に浮かぶあの人へ、贈りたいメッセージを募集しました。皆様の心に浮かぶ恩師、友人、家族など、大切な方への言葉も寄せられました。多数のご応募から、ここでは吉村、津村宛の一部を紹介します。またX(旧Twitter)では「私の心に残る吉村昭」として、本展感想や、好きな吉村作品を投稿いただきました。皆様ご参加ありがとうございました。(掲載にあたり一部表記を整えました)

吉村昭さま

作品を読み始めて40年以上になります。エッセイから戦史ものそして歴史作品へと年齢を重ねながら読みついできました。今思うのは、若い時にいい作品に出合い、それが現在も私の生きる支えにもなっていることへの感謝です。今回、自筆の手紙を読ませていただいて改めて勇気をいただきました。では、では。

あなたの誠実さ、根気強さ、他者への心遣い。すべて私に欠けることばかりである。(うぬぼれて言う訳でもないが)きっと「いいえ、あなたにもよい所はいくつでもありますよ。」と言ってもらえるかも知れない。自尊心が持てないと言われる若者の一人なのか。私も。

多くの作品を拝読し、大ファンになりました。エッセイ集も大好きで先生の生き方、人間性にすっかり魅せられております。奥様もどうかお元気で。

学生時代以来ウン十年振りに吉村さんの小説を数冊よみ、筆力のある文章とは、こういうものだとまざまざと感じ入りました。そういう文章はこちらの背筋をのばし、生き方や姿勢にまで影響を及ぼすだけでなく、幸福を味わわせてくれます。感謝をこめて。

「彰義隊」を読んで、先祖の一人が円通寺に恐らく埋葬されたのであろうことも知りました。遅くなりましたが、心から感謝いたします。

先生の作品を読んで胸にこみ上げてくるものがあります。圧倒的な事実の集積の中で人の熱意が、虚無感が浮かび上がってくるからです。無機質にも思える情報の中から、人が生きた証をすくい出すこと。吉村先生から教わりました。

昭島市からかけつけました。83歳、老いの身には久しぶりの長い移動でした。来てよかった。青春時代に読んだ吉村先生の作品ひとつひとつが浮かんできました。帰ったらしばらく吉村作品にひたります。

大阪から来ました。五十を過ぎて吉村ファンの人から文庫を譲り受けてドはまりしました。当時海外にいましたが、日本人の強い心を学ばせてもらいました。感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

津村節子さま

津村節子先生の「土恋」を拝読しました。その土地の風土を生かした陶芸という仕事はすばらしいと思いました。そんな世界を教えてくれるのも小説だからですね。

福井の文学館にも足を運んでみたいと思います。憧れの女性像です。ご健勝お祈り申し上げます。

腰をいためて時間ができ、ゆいの森で津村節子先生の本に出会いました。小説家としてのお二人の人生を改めて深く知ることができました。これからも一冊ずつ読ませていただきます。ありがとうございます。

「夫婦の散歩道」拝読しました。徹底した取材と真実を追求した文章を書かれる吉村さんの作家人としてではない、夫としての優しさが、津村さんの「お迎えに出て外で待っている吉村昭さん」の描写で伝わってきました。いい思い出が沢山あるのですね。私も家族の、日々の温かい思い出を積み重ねていきたいと思っています。お元気でお過ごし下さい。

吉村昭さま　津村節子さま

沢山の手紙を拝見しました。今はメールで、短文でコミュニケーションをとることが当たり前になってしまっていますが、先生のご家族への心のこもった手紙を見て、しっかりとした文でよく考えて相手に思いを伝えるのはとても素敵だと感じました。保存して後から見返せるのもいいですね！先生のように上手い文は書けませんが、私も言葉を大事にして、大事な人達に感謝を伝えたいと思います。来てよかった！

時代がそうだったとはいえ、ステキな手紙をたくさん書いて残して下さって、ありがとうございます。手紙を書かなくなった時代に手紙がいかに残るものかを教えてくれて素晴らしいことだと思っています!!

X(旧Twitter)募集～#吉村昭の手紙

私の心に残る吉村昭

誰かに手紙を書きたくなる素敵な展示でした。私が特に好きな作品は「海も暮れきる」です。

企画展を拝見し直筆の手紙に改めて言葉の力を感じました。吉村さんの作品では「漂流」「大黒屋光太夫」が好きですが津村さんの「果てなき便り」も是非読んでみたいと思いました。

とても見応えのある展示！往復書簡もご夫婦で作家という作家同士の手紙のやり取りなので、それぞれの短編小説かエッセイを読んでいるかの如く。こういう往復書簡をやり取り出来る夫婦は憧れますね！

確か最初に読んだ作品は『羆嵐』だったと思いますが、強い衝撃を受けたのはよく覚えています。今回の展示で、多くの方との手紙のやり取りの一端を拝見出来たのは大変貴重でした。

ご参加の皆様には、活版印刷のオリジナルポストカードをお渡ししました。取材の旅と、書斎の窓越しに咲く吉村が好んだ紅梅をデザインしました。

企画展のお知らせ
令和６年度企画展　幕末のドラマ 吉村昭が描く「桜田門外ノ変」

『桜田門外ノ変』（平成2年 新潮社）
津村節子氏寄託資料

●会　期／令和６年10月20日（日）～12月18日（水）
●開館時間／9:00～20:30
●休 館 日／11月21日（木）、12月６日（金）
●入 館 料／無料
●会　　場／ゆいの森あらかわ ３階 企画展示室

吉村昭（1927～2006）が昭和63年（1988）から平成元年（1989）にかけて、307回にわたり連載をした「桜田門外ノ変」の主人公である関鉄之介の墓碑は、荒川区南千住の回向院にあり、荒川区民にとっても関係の深い人物です。令和６年（2024）は連載を終えて35年目にあたり、関の生誕200年でもあるため、改めて吉村の代表作品の１つである本作品を取り上げます。本展示では「桜田門外ノ変」に関する収蔵資料を中心として、自筆原稿や自筆メモ、書籍・文献コピーをはじめとした執筆関連資料を紹介いたします。

詳細はこちら

第24回トピック展示「吉村昭とボクシング」関連トークイベント　開催報告
拳にのせた熱きボクシング

出演：坂本博之氏
日時：令和６年３月24日（日）14時～15時

トピック展示「吉村昭とボクシング」の関連イベントとして、元日本／東洋太平洋チャンピオンの坂本博之氏をお招きし、トークイベントを開催しました。坂本氏は、第44代日本ライト級チャンピオン、第30代ＯＰＢＦ東洋太平洋ライト級チャンピオンのタイトルを獲得しました。平成22年（２０１０）８月８日、荒川区西日暮里に「ＳＲＳボクシングジム」を設立・運営されています。

トークイベント第一部「吉村昭「十点鐘」より海帆三郎と坂本博之の対比」では、作中に登場するボクサーについて、自身のファイトスタイルを交えながらお話いただきました。続く第二部「ボクシングセッション」では、一般の方からご参加いただきスパーリングを実演し、坂本氏の得意技である鉈フックも見せていただきました。第三部「ボクシングトーク」では、日本人として初の世界チャンピオンの座を勝ち取った荒川区出身の白井義男氏や、ボクシングに関する様々なトピックについてお話いただきました。

トークイベント中の坂本氏

坂本氏に当館宛の色紙を書いていただきました。

ボクシングセッションの様子

Topics

吉村昭「三陸海岸大津波」ゆかりの地
―宮古市田老の防浪堤（防潮堤）

吉村は、昭和45年（１９７０）刊行の『海の壁』（中公新書 後改題『三陸海岸大津波』文春文庫）で、明治29年（１８９６）、昭和８年、同35年に三陸沿岸を襲った津波の実態と教訓を記しました。執筆にあたり、津波常襲地の田老で取材を行い、第一防浪堤【写真】を歩きました。

この度、東日本大震災発生を受けて設立されたＮＰＯ法人津波太郎（大棒秀一理事長）の「巨大防浪堤を未来へ～岩手県宮古市田老の津波防災伝承活動」が、「プロジェクト未来遺産２０２３」（公益社団法人日本ユネスコ協会連盟　未来遺産運動）に登録されました。これは、日本の豊かな文化や自然を１００年後の子どもたちに継承していく活動を登録するものです。先人の津波防災まちづくりを伝える活動、地元教育機関と連携した防災教育などの取り組みが評価され、令和６年６月９日に登録証伝達式が行われました。先人が築いた防浪堤は管理・保存され、次世代へ継承されます。

【資料協力】大棒秀一氏（ＮＰＯ法人津波太郎理事長）　荒谷栄子氏（宮古市教育委員）

田老の第一防浪堤　令和5年5月31日撮影
昭和8年三陸大津波の翌年から建設。吉村は「堤は厚く、弧をえがいて海岸を長々とふちどっている」防浪堤について「町民の努力の結果なのだろうが、それは壮大な景観であった」と記した（注）。防浪堤は東日本大震災後に整備されている。

（注）『三陸海岸大津波』（平成16年 文春文庫）

訃報

山崎一穎氏

学校法人跡見学園前理事長で、森鷗外の研究を専門とされ、森鷗外記念館（島根県津和野町）館長や全国文学館協議会会長を務められた山崎一穎氏が令和６年９月14日にご逝去されました。

吉村昭記念文学館展示等検討委員会委員長、当館友の会発起人として、長年にわたり展示・運営に関するご教示をいただきました。また、常設展示図録へのご寄稿や、開館記念イベントでのご講演を通じ、吉村昭・津村節子作品を解説いただくなど、区の文化振興に多大なるご尽力をいただきました。

ここに、これまでの山崎一穎氏のご功績に敬意と感謝を申し上げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

☆暑さの一層厳しい夏の日々でしたが、文学館では小・中学生の姿を、例年以上にお見かけしました。Ｐ３のトピック展示「吉村昭「冬の鷹」を読み解く」では、作品の関連資料として、国文学研究資料館よりお借りした「解体新書」（初版）を展示しました。夏休みには、ご家族で、またはお友達同士で、資料をきっかけにご来館くださったお客様も多かったようです。

☆今号の巻頭には、医史学研究者で順天堂大学名誉教授の酒井シヅ先生のインタビューを掲載しています。酒井先生は、順天堂大学の医史学研究室を通して、吉村が調査を進めた作品に深く関わっておられます。創刊から２５０年となる「解体新書」が持つ歴史的意義に加えて、吉村との長きにわたる交友についてもお話しくださった貴重な機会となりました。

お知らせ

おしどり文学館協定　荒川区・福井県合同展示

吉村昭記念文学館

第26回トピック展示

吉村昭の蔵書―福井の史料と歴史小説―

- 会　期：令和6年10月5日(土)～同年12月18日(水)
- 休館日：10月17日(木)、11月21日(木)、12月6日(金)
- 内　容：福井を舞台とする歴史小説「動く牙」「天狗争乱」「雪の花」で使用した蔵書や、津村節子と福井を旅した写真を紹介。また映画「雪の花　―ともに在りて―」の特報映像を放映。
- 場　所：吉村昭記念文学館 2階 エントランス、著作閲覧コーナー

福井県ふるさと文学館

特集展示

吉村昭が描いた福井

- 会　期：令和6年10月25日(金)～令和7年1月22日(水)
- 休館日：月曜(祝日の場合は翌日)、11月28日(木)、12月19日(木)、12月29日(日)～1月3日(金)
- 内　容：吉村昭や福井とゆかりの深い「雪の花」「天狗争乱」「冬の鷹」などの作品を紹介。
- 場　所：福井県ふるさと文学館タイムリースポット

＊平日は午前9時から午後7時まで。土日祝日は午前9時から午後6時まで。

Vol.23 今号の表紙

令和7年1月24日(金)より、吉村昭『雪の花』(昭和63年 新潮文庫刊)を原作とする映画「雪の花　―ともに在りて―」が全国公開されます。今号は、この映画ポスターをお借りしました。

江戸末期、福井に生きた町医の笠原良策は、天然痘から人々を救うため、種痘の普及に尽力しました。原作を読み、映画化を企画した監督の小泉堯史氏は、「努力を積み重ね、勇気を持ち、己を捨てて誠実に働く良策の姿は、永遠に価値ある歴史を生み、現在に生きる私達の心に、強く働き懸けてくれます」と語ります(新潮文庫帯より)。ぜひ、原作を手に取っていただき、劇場で映画をお楽しみください。

監督：小泉堯史　出演：松坂桃李(笠原良策)　芳根京子(良策の妻笠原千穂)　役所広司(日野鼎哉)ほか。製作：木下グループ　松竹　朝日新聞社　配給：松竹

©2025映画「雪の花」製作委員会

平成29年11月5日に、吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館は「おしどり文学館協定」を締結しました。この協定は、吉村昭と福井県出身の作家、津村節子氏の「おしどり夫婦」になぞらえて締結したものです。

今回は、吉村が福井の町医、笠原良策を描いた歴史小説『雪の花』(昭和63年 新潮文庫刊)を原作とする映画「雪の花　―ともに在りて―」の全国公開にあたり、福井とゆかりのある作品や関連資料を紹介します。

◀映画の紹介は「今号の表紙」(左)をご覧ください。

『雪の花』(昭和63年、平成24年改版 新潮文庫刊)

※イベント等の最新スケジュールは当館ホームページからご確認ください。

吉村昭記念文学館ニュース
万年筆の旅 Vol.23
令和6年10月31日発行

■ 編集・発行/荒川区　登録番号(06)0039号
■ 問合せ/吉村昭記念文学館
〒116-0002　東京都荒川区荒川2-50-1ゆいの森あらかわ内
TEL：03-3891-4352
FAX：03-3802-4350
URL：https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/
【開館時間】9時～20時30分　【入館料】無料
【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他
【題　字】津村節子氏

アクセス
- 都電荒川線「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 …… 徒歩1分
- 東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車 …… 徒歩8分
- コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- 東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)